近代広東系華僑のグローバル化：ビジネス・慈善・医療

帆刈浩之

1. 中国人移民史研究の論点

①中国社会の「常態」としての移民

従来，中国社会は儒教思想にもとづく定住農業社会としてのイメージがあったが，中国史とくに明清時期以降は商業発展によって，科挙立身に加えて，商売による出世も可能となり，流動性の高い社会に変容した。都市志向の地理的移動および社会的移動が進行する。国内移住が人口増加による生き残り戦略として社会的に普及し，宗族や同郷組織がその受け皿として機能し，地縁血縁ネットワークが形成されていった。こうした社会の流動性が高いネットワーク型の移住民パターンは現在まで続いている。

②移民を支えるシステム

宗族や同郷組織などによる相互扶助（就労斡旋・資金貸与・手紙伝達・葬送へ援助）移民を支えるシステムがソフトウェアとすれば，交通（特に水運）の整備，港の組織（宿泊や渡航チケットの手配などを行う客桟，代筆業），同郷会館による斡旋や扶助，出版業の発展（旅行ガイド）はハードウェアの発達である。こうしたハードとソフトを備えた移民システムが華僑の故郷と移民先をつなぐネットワーク上に形成された。このネットワークがリクルートから送金，遺体の故郷への送還まで，様々な機能を担っていた。

③グローバル・ヒストリーの中で

社会経済の動きは一国の枠内で把握することは不可能であり，まして移民というテーマはもっとも地球規模の文明間の連動性の中で探究される必要がある。具体的には環境史（気温低下，遊牧民南下，疫病）の視点，さらに「近代」文法の普遍化と差別などのテーマが考えられる。

④コモン・インタレストとして

かつて移民研究はマイノリティー研究としての側面があったが，移民現象の普遍化はこれと異なる視点が必要であろう。移民という概念をより広く人々の地理的移動，社会的移動といった，だれにでも起きうる人生の一局面として捉える。しかも，移動することは一時的なリスクはあるとしても，新たな可能性を内包していると考えられる。これによって共通の課題として自分の問題として考える契機となるであろう。中国人移民の歴史はこうした事例を多く有している。

2. 広東系移民

世界史上の重要なグローバル化の画期である16～18世紀，西洋諸国のアジア進出によってグローバル経済の形成と産業革命が進行し，その波は東アジアにも及び，例えば中国にサツマイモが導入され，人口増加を招き，海外移民への要因となっていた。しかし，より大規模な人口移動は19世紀の中期，東アジアが労働力市場となって以降である。そこで主役となるのは広東系移民である。欧米商人が広東や香港を拠点とした関係でアジア進出の補佐役になっていた。例えば，日本の横浜開港時に進出してきた西洋商人は香港や上海から広東人買弁をともなってきたのである。さらに欧米諸国による東南アジア，南北アメリカにおける開発には，こうした広東系ブローカーが労働者を斡旋した。そのため，19世紀アメリカ華僑の60%が広東省の台山県出身だと言われるほどであった。

3. 香港東華医院の慈善ネットワーク

近代華僑を代表する広東系移民のネットワークのメカニズムを体現していると考えられる組織が香港に1870年設立された東華医院である。香港植民地政府の支援のもと，中国人に対する中国医学による治療を行う病院であった。植民地の発展にともなう中国人人口の増加への対応として秩序維持と衛生環境の改善のため，中国人富商と政府の利害が一致した結果である。

しかし，形式は病院であったが，その活動の重心は広東系華僑への救済にあった。具体的な活動は，病気治療，難民収容，里帰りの旅費支給，助葬，災害救済，廟・義学・託児所・養老院の運営などであった。

慈善活動の中でもとくに注目すべきは，海外で客死した同郷者の遺体を引き取り，保管し，その後故郷広東に送り返すという「運棺（骨）」という活動を大規模に展開していたことである。このことは，広東系華僑のネットワークがリクルートから死後の問題にいたるまでを保障しており，広東人の移民リスクを低減する上で極めて有効であった。現在，香港東華医院の後身である東華三院の中の文物館には当時の書簡が大量に保存されているが，海外華僑団体や個人との連絡がいかに緊密であったかを物語っている。

小結

①伝統と近代の二面性

東華医院は近代的な病院として設立されたが，その前身は遺体を保管する伝統的な施設であり，また東華医院の活動は明清期以来，中国の各都市で発達してきた同郷会館と類似したものだった。さらに医療の内容に関しても中医薬による治療が基本であり，徐々に西洋医学が導入されていった。また，運営者に注目した場合，貿易商人を中心としながら，中心的に活動したのは英語を話す華人エリートたちであった。

②重層的ネットワーク

広東系華僑のネットワークはモノの移動である貿易はもちろん，移民斡旋から海外送金・手紙伝達にいたるまで，多様な側面を有していた。そして，それらが互いに連動していた点に特徴があった。すなわち，移民斡旋と人身売買との距離は意外に近いとも言える。移民ビジネスと慈善活動とは表裏の関係をなしていた点に，華人社会における互助のかたちを見てとることができよう。

③日系人移民研究との比較

一つは社会構造に関する理解についてである。華僑の場合，職業は可変的であった。もとの職に拘らずに社会上昇を志向した。しかし，華僑社会が果たした機能や「型」は不変であり，とくにネットワーク内の「媒介」機能は重要なシステムであった。これは歴史的な「中人」「保人」「包」など仲介・請負の役割が生き続けていると言える。

また，日系人移民がよく官主導であると言われるのに対して中国系移民はあくまで民主導である。そのために，華僑社会では慈善を中心としたネットワークが必要とされたのである。その具体例としては，東華医院の関連組織で，女性や子供の救済にあたった保良局は東南アジアに売られていた「からゆきさん」40 名余を救出し，1898 年明治政府より表彰されている。「棄民」という言葉があるが，中国人移民はもとより「棄民」であった。